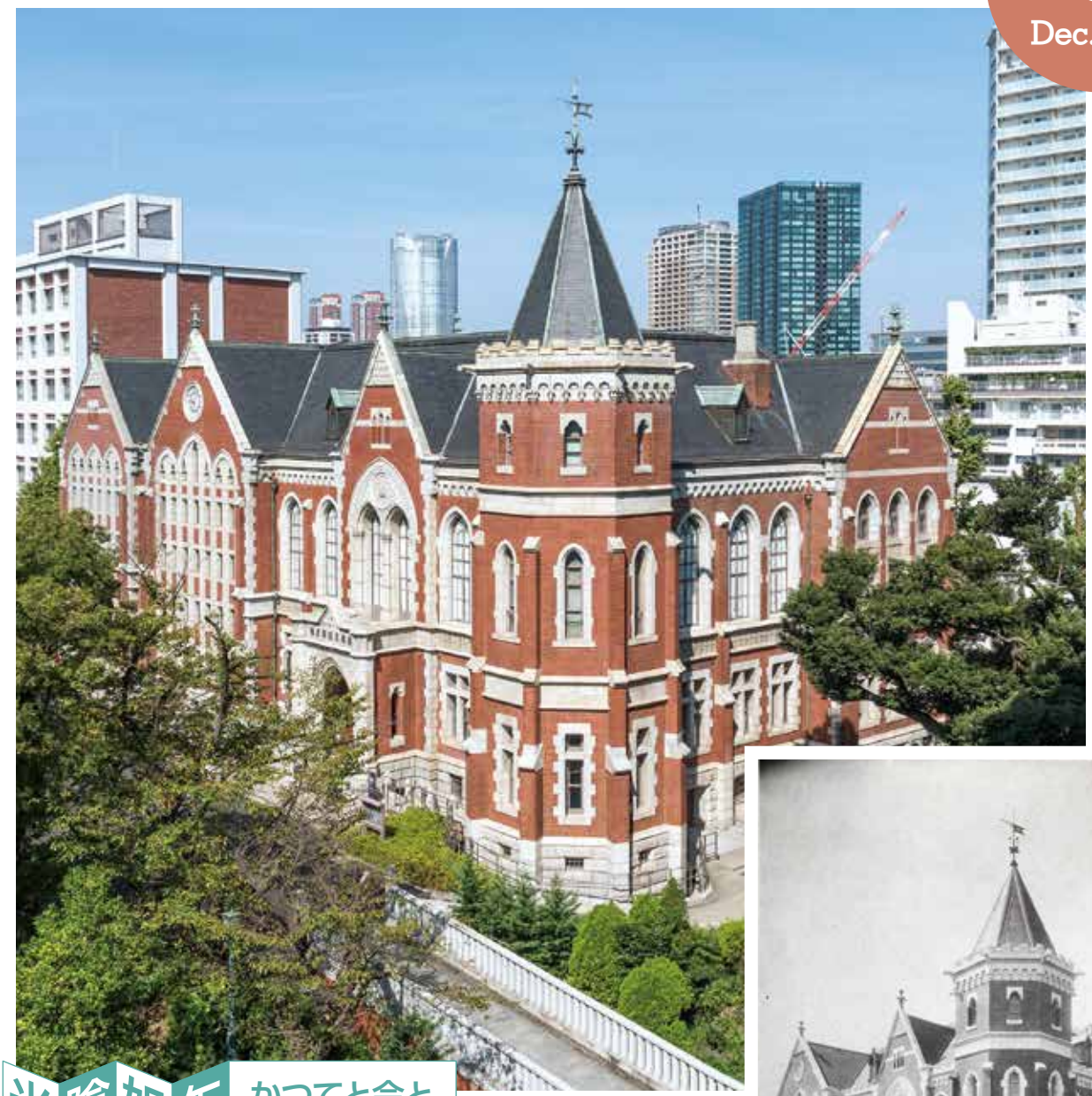
福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより

Tempus

Tempus Fugit —— 時は過ぎゆく

FUKUZAWA YUKICHI MEMORIAL
KEIO HISTORY MUSEUM

No.01
Dec. 2021



光陰如矢 かつてと今と

110年後の慶應義塾図書館

当展示館来館者向け広報紙として「Tempus（テンプス）」を創刊します。本紙は春秋の企画展にあわせて発行していく予定です。題号は図書館外壁の大時計に刻まれたラテン語Tempus Fugitに由来します。展示館とともに過去・現在・未来を超えて時を繋ぐ役割を果たしていきます。

表紙では慶應義塾史上の新旧写真を掲載します。第一回目は図書館です。新旧変わらぬ姿のようですが、この建物は関東大震災による大損傷と、空襲による炎上を経験しています。中央奥は六本木ヒルズ。背後は今後開発ラッシュです。

1912年春、竣工時の慶應義塾図書館（右下、慶應義塾福澤研究センター蔵）と、同位置やや上からの2021年秋の様子（撮影=石戸晋）。

三田第一校舎建設時に出土した塩壺

慶應義塾大学文学部教授　安藤 広道

今年2月ころ、福澤研究センターの都倉武之さんから、1937年の『三田新聞』に、三田の第一校舎建設時に出土した江戸時代の塩壺の記事が載っていることを教えていただいた。その記事の写真を目にしたとたん「これは面白いことになるかも」と思ったのを覚えている。写真の塩壺のひとつに見覚えがあったからである。

どこで見たのかというと、私のいる民族学考古学専攻の収蔵庫である。それだけなら当たり前のことだが、話はそう単純ではない。実は十数年前、収蔵庫の片隅で長く誰も触ってなさそうな汚れた木箱を見つけた。中には多種多様な考古学資料が入っていたが、どれも出土地等の情報は失われていた。全てに火を受けたことによる変色、亀裂、欠損などがみられ、壁材の漆喰が付着している。火災現場からの回収資料だということはすぐに推測できたが、いつどこで火災に遭ったのかは分からなかった。しかし、その後、ある雑誌に掲載されていた三田の考古学教室内の写真に、これらの資料のひとつが写っているのを発見し、また考古学教室が1945年5月の空襲で焼失したことが分かって、場所と日にちが判明した。件の塩壺はその木箱のなかにあったというわけである。

記事の写真は不鮮明であるが、器形や刻印の特徴、影から分かる器面の凹凸が完全に一致するため、木箱内の塩壺と同一のものであることは疑いない。塩壺（焼塩壺）は、食事の際に料理に振りかけるいわゆる食卓塩の容器で、素焼きの器に粗塩を入れて窯で焼き、そのまま商品化したものである。本例には「サカイ/泉州磨生/御塩所」という刻印があり、1740年代に製造・販売されていたものと考えられる（小川望『焼塩壷と近世の考古学』2008年）。

つまりこの塩壺は、1740年代に大坂の堺で製造され、江戸で流通していたものを三田キャンパスの地にあった島原藩中屋敷の誰かが購入し、食卓で使用した後、第一校舎付近に廃棄した。そして1937年の工事の際に偶然掘り出され、研究・教育用の資料としていったんは考古学教室に収蔵されたものの1945年の空襲で被災。運よく火災現場から回収されたが出土した場所や日にちの情報は失われ、それが今回の発見で再び明らかになったということになる。

昭和十二年七月十日

埋れた珍土器

三田學部新校舎建築場から出土

貞享年間の鹽壺と德利

写真左の塩壺が現存するもの
（左上カラー写真）
『三田新聞』（1937年7月10日）

塩壺は、江戸時代の食文化に関わる資料として紹介されるのが一般的である。しかし、この塩壺に限らず、一つひとつの資料が今そこにあるのは、さまざまな人や事が介在してきた結果であり、そうした経緯は資料そのものや多様なメディアのなかに痕跡を残している。それらもそれぞれの資料の価値に関わる重要な側面である。資料を見るもうひとつの面白さがそこにある。

橋本孝教授と宮崎友愛教授

橋本　孝

宮崎 友愛

樽井 正義

慶應義塾大学名誉教授　樽井 正義

実学を学ぶ慶應義塾において、人の生き方、人と人との関わりを問う倫理学は、1890(明治23)年、大学部文学科に開講された十数科目の一つで、1920(大正9)年の大学令以降、1949(昭和24)年の新制大学においても、文学部哲学科の一専攻とされている。1960年代後半、日吉から三田に私が進学したとき、専攻には橋本孝、宮崎友愛、そして三雲夏生の三教授はじめ六名の教員がおられた。倫理学を専攻としてもつ大学は希有だが、なかでも充実した陣容で今日に至っている。

当時、学生は2年生から4年生まで二十数名だった。3年生の秋、米軍資金導入に反対するストライキを終え、久しぶりに授業に出た。戦前にフライブルク大学に留学されてエドモント・フッサールの現象学を研究された橋本先生の西洋倫理学史Ⅱ(近代)、冒頭、10人ほどの学生の出欠を取られると、「今日は休講にする、君は一緒に来たまえ」とおっしゃり、教室向かいの研究室に招かれた。敗戦後の義塾再建の中で、先生が理事としてその新設に尽力された図書館・情報学科は、その頃西校舎の一角を占めており、ご自分の研究室もそこにあった。夏休み前に、学生にとっての闘争の意義、つまりは理事会の対応への批判を、倫理学専攻学生有志として朝日新聞に投稿し、専攻委員だった私の名で掲載された。それに目を留められ、どういう考えなのか訊きたい、とのことだった。教員の間で「カポネ」と呼ばれて一目置かれていた先生で、言葉を交わすのは初めてだったが、学生の話に短い問を挟むだけで批判めいたことはおっしゃらず、耳を傾けて下さった。定年制がしかれる直前で、先生は古希を超えておられたが、孫ほども年の違う学生の言動に、強い関心をもたれていることが感じられた。

学部では西洋哲学史Ⅰ(古代中世)を担当されていた宮崎先生からは、大学院でイマヌエル・カントとその倫理学を形式主義と批判して実質的価値倫理学を提唱したマックス・シェーラー、当時主流の二つの倫理学説を教えていただいた。同僚にも学生にも丁寧に接する篤実なお人柄で文学部長に推されたとき、三田山上に散在していた4学部の研究室を集めて研究室棟を新設する計画が進められていた。部屋数と配置をめぐる文学部15専攻(当時)それぞれの要求の調整、塾監局、他学部との折衝、想像されるご苦労は一切語られなかったが、一言、学部長職というのは「君、あれは刑罰だよ」とおっしゃったことがあった。大学院の授業の後研究室でお話しする折に、先生は神官の長男にしてその職を継がず、西洋哲学に進まれたが、年とともに東洋哲学に親しみをもつようになられたことも伺った。そこで、先生がいま考えておられることを伺いたいとお願いした。修士課程の二年間、先生の授業を履修していたのは私ともう一人、その要望に応えて最後の半年、老子についてご自身の解釈を講じて下さった。

橋本先生と宮崎先生、ともに専攻を超えて学部と義塾に大きな貢献をされたと同時に、学生の考えに強い関心を寄せられ、またその思いに応えて下さった。文字通り塾というに相応しい教員と学生の関わりがあったが、当時のお二人と同じ齢になって振り返ると、改めて深い感謝と教職を継いだ者としての反省とを抱かざるをえない。

―― 写真はすべて1970年卒業アルバムより ――

千客万来

寄せられた声から

《 》=館からのレスポンス

時々、フフと笑いがはいる展示があってよかったです。／慶応の自由で柔軟な、一方で、原則に忠実なエピソードがとりあげられていました。／自画自賛になっていない展示に共感した。／ちゃんと合格してからまた来ます。**《来春日吉でお会いしましょう》**／成功、発展の歴史の裏にある試行錯誤、やり直し、人と人とのつながりが立体的にわかる展示でした。／福澤諭吉の、矛盾した要素（真面目なところとくだけたところ、理論と実践、保守と革新）がそのまま展示されていて、人間の豊かさを感じました。／建築模型はぐるりと一周したかった。／現代との身近さと将来への貢献に繋がる点も展示しても良い。**《内容が拡散しすぎないよう、敢えて原点を示し、個性的な解釈と発展を期待してます》**／実は岩田剛典さんファンで、ナレーション目あてでしたが、静かで落ちつきのある空間が心地よく、福澤諭吉その人のことを少しだけ詳しくなれて、とても有意義な時間でした。／「道聴途説」:学生と教員間の緩い且つある種密なやり取りが、明治に一冊のノートを介してなされていたことに驚かされた。**《よくぞ、注目してくれました!》**／拝金思想では全くなく、お金を大事にする考え方は万人にとって大切な考え方で、経済がうまくいく事が人間にとってどれ程大切かがよく分かりました。／時の塾長は社中の一人としてあつかわれているのは好感がもてました。**《塾長の顔写真を並べるのはやめようと思ってやめました》**／平成の資料を増やして欲しいです。**《これから少しずつ歴史化していきます》**／福澤の凡人主義=極めて現実の人間界に立脚して、人生の大切さを説いたものだと思いました。

取り上げて欲しい人・こと

石川忠雄　井筒俊彦　小川駒橘　小幡篤次郎　折口信夫　槇智雄　小泉信三　渋沢栄一　夢野久作　藤山一郎　近藤真琴　勝海舟
鎌田栄吉　高橋誠一郎　早慶戦　学徒出陣　建物の歴史　スポーツ　三田文学　ハーバードと慶應　カレッジソング　コロナ禍の学生

企画展示室の予定

企画展示室では年2回程度、当館主催の企画展を予定しております。

2021年12月13日～2022年1月22日
慶應義塾福澤研究センター新収資料展
近年新たに福澤研究センターへ収蔵された、寄贈・寄託・購入資料から代表的なものをご紹介します。

2022年春期企画展
慶應野球と近代日本（仮）
野球伝来150年記念。武士道野球、精神野球から距離を置き、独自の野球観を紡いできた慶應野球を歴史的資料からたどります。

2022年秋期企画展
曾禰中條建築事務所と慶應義塾（仮）
慶應義塾の多くの建築を手がけた戦前最高最大の建築事務所。コンドルから三菱合資会社を経て流れる思想と義塾の共鳴を考えます。

慶應義塾史展示館の図録

『福澤諭吉記念慶應義塾史展示館開館記念図録』
A4判　24頁　2021年7月4日発行　800円
常設展示資料と第1回企画展より厳選した資料約40点を掲載し、福澤諭吉と慶應義塾のエッセンスに触れられる開館記念図録です。

『慶応四年五月十五日――福澤諭吉、ウェーランド経済書講述の日』
A4判　76頁　2021年10月9日発行　1200円
慶應義塾の原点として最も大切にされる上野戦争時のウェーランド経済書講述をテーマとした第1回企画展の全出品資料約70点を掲載しています。

当館常設展示室受付、カフェ八角塔、三田インフォメーションプラザのほか、慶應義塾公式グッズサイト（https://keiogoods.jp/）からもお求めいただけます。

基本情報

開館年月日　2021年7月5日
空間デザイン　槇総合計画事務所
展示設計製作　株式会社トータルメディア開発研究所
床面積　常設展示室:280.44㎡　企画展示室:60.99㎡

スタッフ一覧

館長　平野　隆
副館長　都倉　武之
所員　西澤　直子（兼運営委員）
所員　阿久澤　武史、井奥　成彦、クラシゲ,ジェフリー　ヨシオ、小山　太輝、齋藤　秀彦、末木　孝典、山内　慶太、結城　大佑
専門員　横山　寛
事務局　福澤研究センター　兼務

来館者数

2021/7	2021/8	2021/9	2021/10	2021/11
2145名	1622名	725名	1256名	1288名

諸記録

4月1日	組織開設
4月14日～16日	KeMCoグランドオープンに合わせプレオープン
5月6日	第1回運営委員会
5月15日	完成式
6月10日	第1回所員会議
7月1、2日	内覧会
7月5日	開館式および開館
7月5日～10月9日	企画展「慶応四年五月十五日――福澤諭吉、ウェーランド経済書講述の日」

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより
Tempus（テンプス） No.01
発行日　2021年12月12日（年2回発行）　印刷　（有）梅沢印刷所
編集・発行　福澤諭吉記念慶應義塾史展示館
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45　電話 03-5427-1200　https://history.keio.ac.jp/
Facebookはこちら：@keiohistory　Twitterはこちら：@keiohistory　Instagramはこちら：@keio_history